

「水銀の道」飛鳥池工房遺跡の出土品

内容

- ✓ 水銀と神仙思想
- ✓ 狂心渠(たぶれごろのみぞ)とは
- ✓ 大和水銀鉱山から飛鳥池工房遺跡への水銀の道
- ✓ 多武峰水銀鉱山から飛鳥池工房遺跡への水銀の道

はじめに

大和地方は、大和川の水利によって地理的に難波津(大阪湾)に近く、仏教はじめ文物や渡来人、遣隋・唐使らの往来、また衢(ちまた)の発達など、倭国発展の地政学的な条件に適した場所である。為政者は国家体制を創る朝廷を置くのにふさわしい場所として、国家の原資となる水銀鉱山や、豊かな水田に囲まれた肥沃な土地である飛鳥こそ最適な場所と考えた。水銀は金や銀をも融かす性質を持つ液体の金属であり、古代の宗教・文化とともに律令国家体制構築過程における経済発展の礎となった物質である。官衙である飛鳥池工房遺跡での水銀アマルガムによる金銅手工業技術などの集積は、後の東大寺盧舎那仏造立や中央集権国家への建設を進めるための産業発展に繋がるものであった。また、水銀は逼迫する大陸情勢に対応する原資の一つでもあり、為政者の背後にある不老不死を目指す神仙思想の仙薬(硫化水銀や薬草)でもあった。

ここでは、道教の神仙思想に影響されたといわれている飛鳥の歴代天皇が「賢者の石」と呼ばれた辰砂を、金、銀以上の価値を持った物質として、大和王権から続く飛鳥朝廷において、水銀をどのように入手し、使ったか、そのためにどのような政策をとってきたのか。飛鳥池工房遺跡での水銀アマルガムの銀粒の出土は、飛鳥時代を通して、皇極・斉明、天智、天武・持統朝が、律令国家体制を支えた技術、工業の基本体制の構築を目指したのではないかと考えると、近畿一帯の水銀鉱床の中央に大和が位置する事実は、日本古代史に必ずや何らかの影響を与えたのではないかと考える。

中央構造線と水銀鉱脈



7000万年ほど前の地殻変動によりできた、日本列島西南日本を九州東部から関東へ縦断する世界第一級の断層、中央構造線上には、主要鉱物として辰砂、黒辰砂、自然水銀などの水銀鉱床が多い。

中央構造線

Google earth 4.0

日本水銀鉱床

大和地方は、古代から辰砂(水銀)鉱脈が最も多い地域のひとつである。

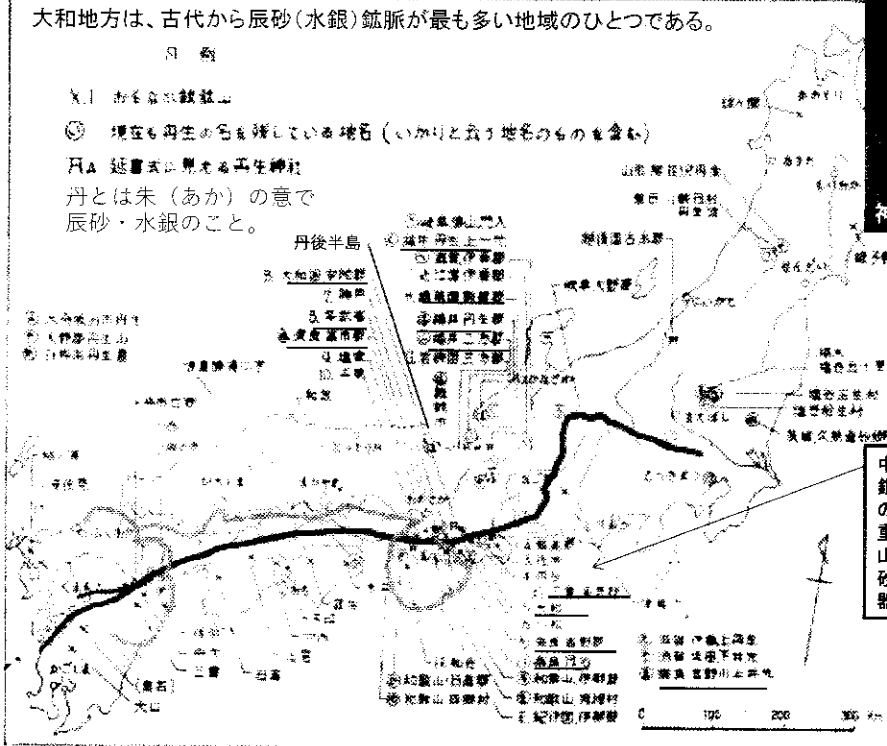
凡例

○ 大和の水銀山

◎ 現在も再生の名残が残っている地帯(いかりと云う地名のものも含む)

凡A 延喜式に引く丹生神社

丹とは朱(あか)の意で辰砂・水銀のこと。



神武天皇聖蹟顕彰

宇陀菟田穿邑(うだうかちむら)

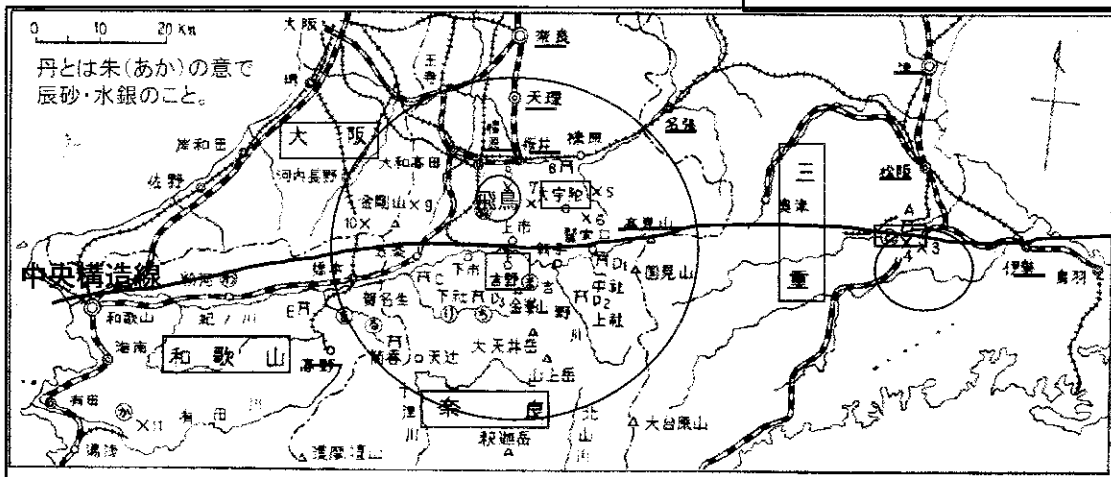
神武東征の道は中央構造線付近にあり、水銀の道に重なっているように見える。

中央構造線上には水銀鉱山が多い。大和の大和水銀鉱山や三重県多気郡の丹生鉱山などの周辺では辰砂を利用した縄文土器が発掘されている

矢嶋澄策、「日本水銀鉱床の史的考察」、『地学雑誌』72、178-188(1963)、一部加筆

近畿圏水銀鉱山

飛鳥を中心とした地域に水銀鉱山や水銀に関係した神社、河川が多い。



X印: 主な水銀鉱山

矢嶋 澄策, 『日本水銀鉱床の史的考察』, 『地学雑誌』72, 178-188(1963)。一部加筆。

卍印: 水銀と関係する神社で、丹生神社という。丹生は水銀の採掘にかかわった氏族(丹生氏)。

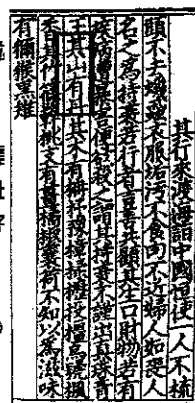
丹生氏は丹生都比売(ニウスヒメ(天照大御神の妹)を祭祀する神官となった。丹生神社は水銀の枯渇とともに稲作に転じることで、名前が水分神社となり祭神はミズハノメ(水の女神)または、タカオカミ(水神、龍神)となった^{1, 2)}。1) 松田壽男『古代の朱』筑摩書房(2006)。2) 松田壽男『丹生の研究 歴史地理学から見た日本の水銀』, 早稲田大学出版部, 昭和45年。

大和王権と水銀と道教思想

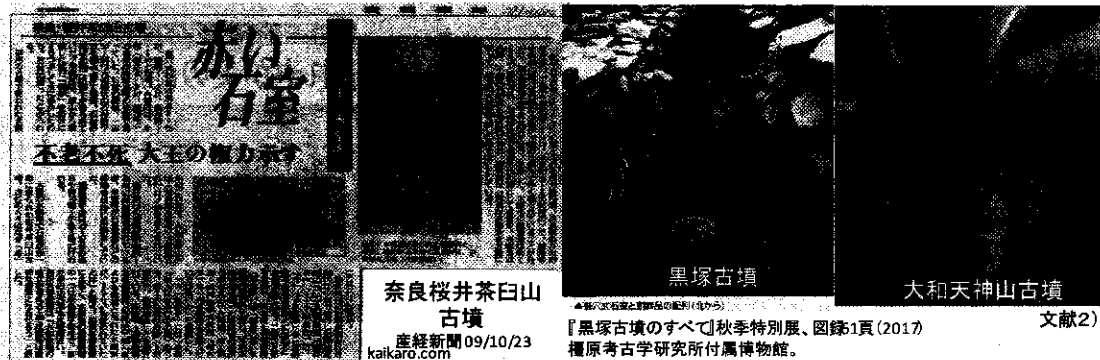
- ✓ 神武東征神話は、古墳初期に水銀資源を掌握した一族が水銀朱を求めて宇陀の大和水銀鉱を奪略し、大和王権を世紀後半に確立したものとされている。
- ✓ 『魏志倭人伝』に「其山有丹」とある。(丹: 辰砂(硫化水銀)、水銀)。
- ✓ 桜井茶臼山古墳では200kgの水銀朱(硫化水銀)が見つかった。朱は死者の再生祈願の信仰として古墳などに蒔かれている。また、纏向遺跡の大和天神山古墳は、41kgの水銀朱が出土した。卑弥呼の墓と言われる箸墓古墳では桃の種(道教では不老長生、厄除け)、麻の種子(幻覚状態による呪術)が見つかり道教と水銀、呪術のかかわりが考えられる。
- ✓ 以下の古墳の水銀は鉛同位体比分析から近畿圏産出の可能性が強い。大和には大和水銀鉱山(奈良県宇陀郡菟田野町)があり、上述の古墳は最も近いここから運搬されたと考えるのが現実的である。しかし「水銀の道」ともいえる運搬ルートははまだ明らかでない。

1a) 山口博「大麻と古代日本の神々」宝島社新書198頁(2014)、1b) 橋本輝彦「纏向遺跡の発掘最前線」『歴史人』KKベストセラーズ、62-71(2013)。

2) 南武志 他「鉛同位体比測定に基づく遺跡から出土した朱(水銀朱)の産地の解析」分析化学、62, 825-833(2013)。



『魏志倭人伝』



奈良桜井茶臼山古墳

産経新聞 09/10/23
kaikaro.com

黒塚古墳

▲黒塚古墳と野原の彫刻(4カ所)
『黒塚古墳のすべて』秋季特別展、図録1頁(2017)
橿原考古学研究所付属博物館。

大和天神山古墳

文献2)

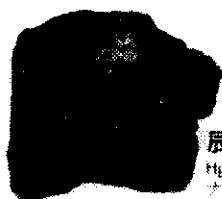
水銀

水銀(すいぎん、水がね、)

- ✓ 常温、常圧で液体の金属元素。硫化物である辰砂または自然水銀として産出。水銀は金や銀などを融かし、アマルガムと呼ばれる合金をつくる。

比重 水 1.0 辰砂 8.1 水銀 13.5 金 19.3

- ✓ 不老不死の薬、神仙思想の「仙丹」(仙人になる薬)の原料と信じられていた(道教の錬丹術)。
- ✓ 水銀は日本の歴史では、国家的プロジェクトに必要な重要な鉱産物であった(後述)。



辰砂 (Cinnabar) 字根主、
Hg₂S 千石鳥羽池郡宇陀町
大和 針道山
三國地学台観望台
No. 001336, 8.5 cm

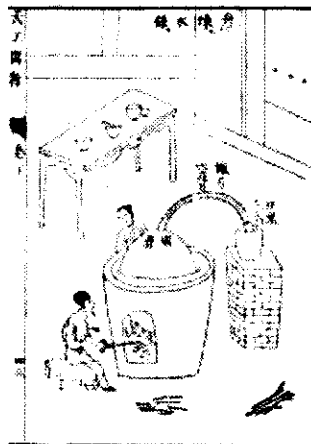


図4 水銀の製造

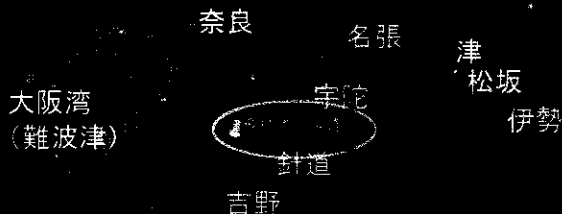
千石鳥羽池「日本水銀製造の歴史」(鳥羽池)「日本民
族学資料集」第 10 巻(1987)「(1)水銀」111-112
頁 (pp.28, 38, 139)

道教 道教の中心概念は「道」(タオ)であり、「道」とは宇宙と人生の根源的な不滅の真理を指す。

この道と一体となる修行のために不老不死の霊薬(仙丹)を錬り(錬丹術)、仙人(神仙思想)となることを究極の理想とする(不老長生を目指す仙道観術)。丹とは辰砂(硫化水銀)または、仙丹、聖力のある薬(丹)のこと。

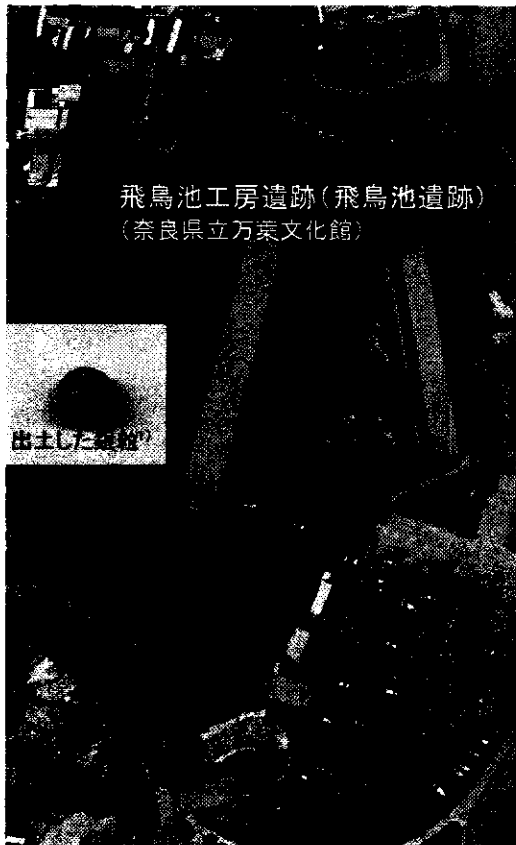
①「道教の本」字根(1993) ②福井光司「道教と日本思想」
法政書局(1982) ③和田洋「日本古来の儀式と祭祀・信仰」中
25頁 法書院(1995)

各地の水銀鉱山から飛鳥池工房遺跡へ水銀は運ばれた



飛鳥池工房(遺跡)は、後の律令国家体制を支えた技術、工業の官衙(官庁)の工房である。

Google earth より



飛鳥池工房遺跡(飛鳥池遺跡)
(奈良県立万葉文化館)

出土した銀粒

概要

1997年12月から開始された飛鳥池工房遺跡発掘調査で直径5mmほどの一点の銀粒が出土した。分析すると銀のアマルガム(水銀の合金)で、付近にはアマルガム法による製錬・精錬過程を一貫し行っていたと考えられる坩堝類なども見つかった¹⁾。

この事実は、飛鳥時代以前からわが国で鍍金(メッキ)が行われていた可能性を示す重要な発見であり、この技術が後の東大寺廬舎那仏の造顕の基礎となったことは想像に難くない。一粒の銀粒が、工房の技術集団の好奇心と無心の努力を想像させる。天武・持統朝の律令国家体制を支えた技術、工業の礎となったことは疑いないだろう。鍍金に必要な辰砂、水銀が、どの地域からどのような経路で飛鳥池工房遺跡に運ばれたのか、飛鳥に向かうこの「水銀の道」の本来の目的はどのようなものであったか、地理的に外観する。

1) 村上隆、「古代の金・銀精錬を考えるー飛鳥池遺跡の事例を中心にー」、『奈文研紀要』30-31、(2007)。

『日本書紀』に見る道教思想と皇極天皇一

▶ 642年 皇極天皇元年 七月条

「日照りが続いたので雨乞い¹⁾のため、牛馬を殺して²⁾諸社の神を祀り祈ったりしたが、まったく効果がなかった。蘇我大臣蝦夷は、諸寺で大乘經典³⁾を転読悔過し、雨を祈ろうとしたが効果はなかった」…道教、仏教

- 1) 福永光司、千田総、高橋徹『日本の道教遺跡』p. 24、朝日新聞社(1987)。古代、雨乞い儀礼の一環として、牛馬を殺して、神に捧げることなど道教呪術儀礼が大和朝廷に伝来し、在地の川神信仰と習合したものと考えられ、古代中国に起源を持つ。
- 2a) 栗原朋信「犠牲礼についての一考察」『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館、(1978)。日本古代の殺牛祭神はあくまでも渡来人の祭祀であり、日本の農耕儀礼の一般的な祭祀ではない。
- 2b) 金子裕之『AERA Meek 考古学がわかる。』p. 50朝日新聞社(1997)。これらは道教呪術儀礼の影響による、牛馬の渡来自体が古墳期からであり、殺牛馬のまじない文化は渡来系の信仰とされる。
- 3) 大乘仏教の教えを説いた經典のこと。

▶ 642年 皇極天皇元年 八月条

天皇は南淵(ミナブチ)の河上に行って跪いて四方を拝んだ。天を仰いで祈り請い願った⁴⁾。すぐに雷が鳴って、大雨(ヒサメ)が降った。ついに雨が降ること5日。あまねく天下を潤した。…道教(シャーマン)(密教:大孔雀経呪法)

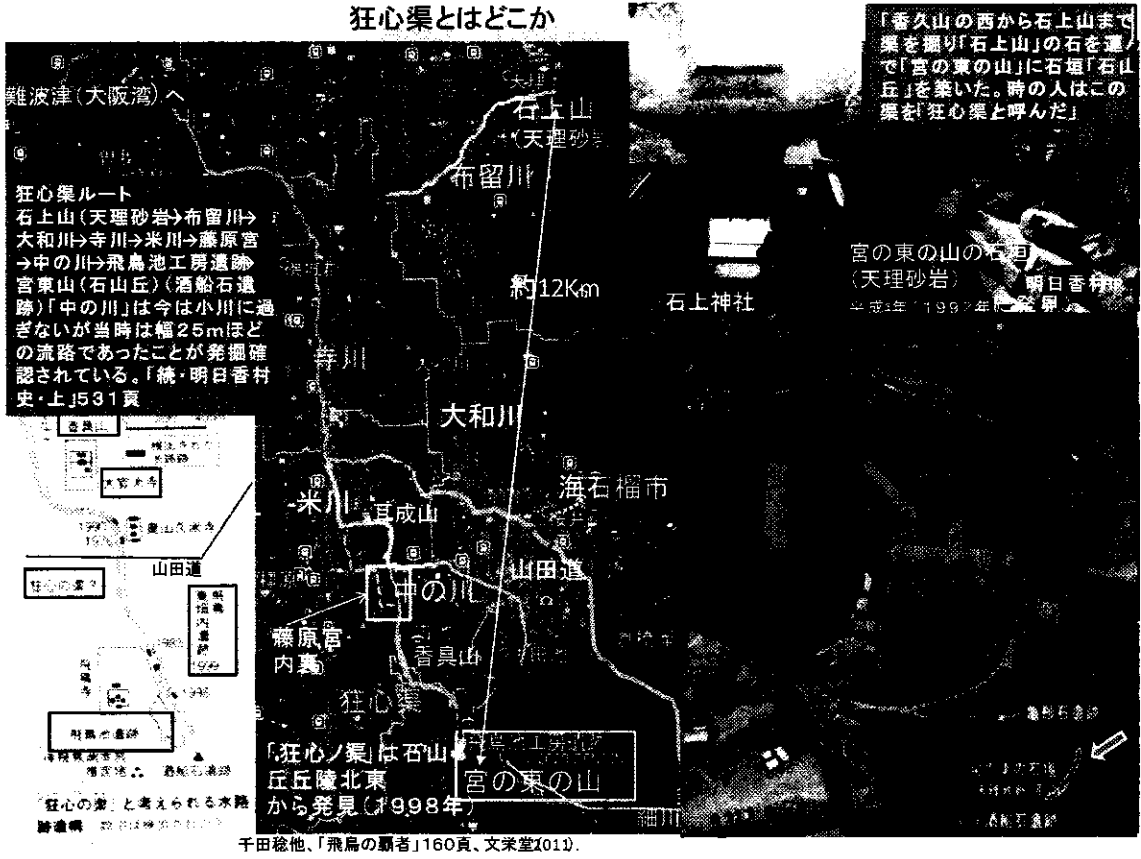
- 4) 1)参照
四方拝は道教の様々な道術を行うときの宗教的儀礼であって、道教の教理書には、「四方を拝して氣を服す」とか「四方を拝して以って神明を感ぜしむ」とある。
- 5a) 福永光司『道教と日本思想』p. 78、徳間書店(1985)。ここには皇極天皇のシャーマンとしての要素がうかがえ、それは鬼道に通じ、魏志倭人伝にある鬼道とは神道、ひいては道教に通じるものであるとしている。
- 5b) 西田隆雄『日本政変史』『神代史大辞典』p. 543、吉川弘文館(2004)。中国の民間信仰である道教の思想や祭儀形態を、自然崇拜・精霊崇拜(アニミズム)を採る日本人の風習と『記紀』などに取り入れていった。

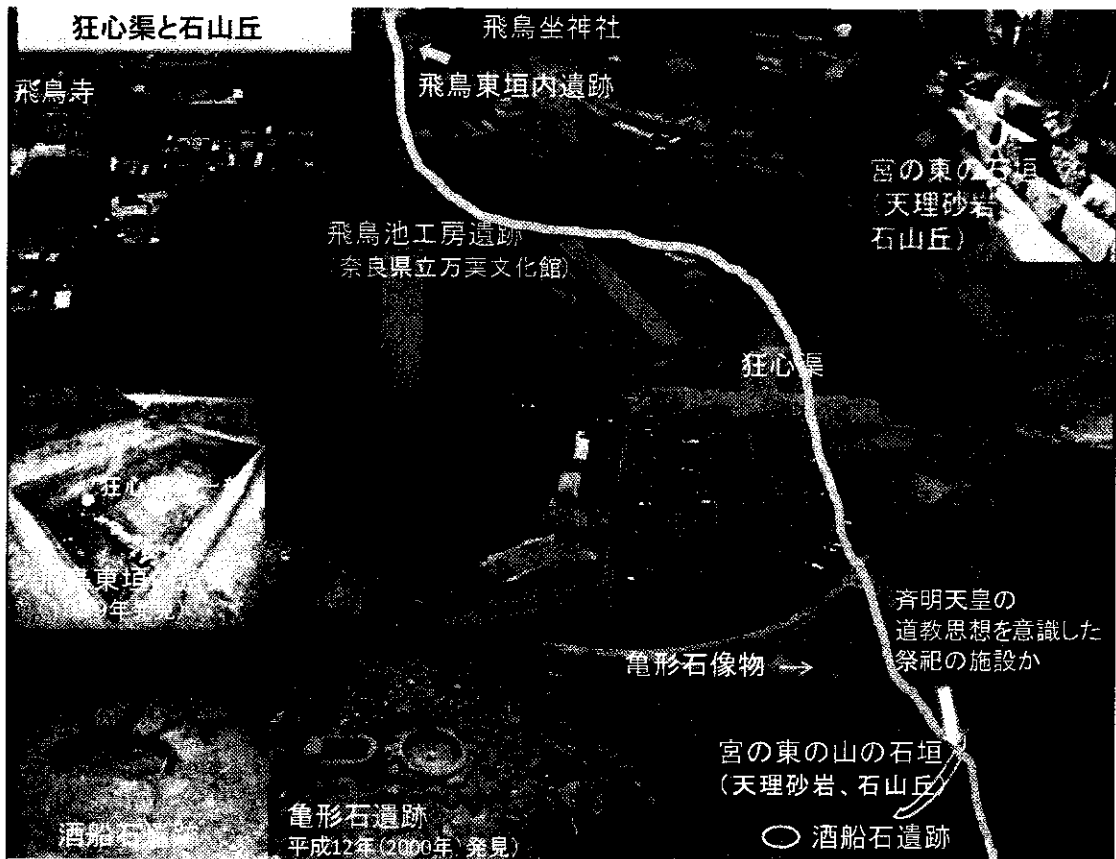
『日本書紀』に見る道教思想と齊明天皇—2

➤ 656年 齊明天皇2年 飛鳥板蓋宮で即位
 「この年、後飛鳥岡本宮を造営した。また「田身嶺(多武峰)⁶⁾に觀(たかどの)⁷⁾を建て兩槻宮(ふたつきのみや)⁷⁾また天宮(あまつみや)⁷⁾とも言った。天皇は工事を好まれた。香久山の西から「石上山」(いそのかみやま)⁸⁾まで渠を掘り、舟200隻を使って「石上山」の石を運んで「宮の東山」に石垣(「石山丘」いしのやまおか)を築いた。渠の掘削に延べ3万人、石垣の建設に延べ7万人の功夫を費やし、時の人はこの渠を「狂心ノ渠(たぶれごろのみぞ)」と呼んで、造った端から壊れるだろうとそこの土木工事を非難した。また、吉野宮を造営した。⁹⁾

6a) 千田稔、金子裕之『飛鳥・藤原京の謎を握る』p.114 文英堂(2000).
 飛鳥の東の山にある談山神社あたりが有力。桜井市針道には多武峰水銀鉱山があった。
 6b) 相原篤之「酒船石遺跡発掘調査成果とその意義」『日本考古学』1、171-180、2004。現在の亀形石造物を含む酒船石遺跡あたりとも考えられるが、考古学的な成果からは別の場所か、以下、6a)参照。この亀形石造物の亀は道教でいう蓬萊山を背負うという意味において、天宮が置かれた多武峰を背負っているという構図を齊明天帝が具体的に表現したものと思われる。
 7) 兩槻宮は道教寺院の道觀(見張り台)。天宮は道教の仙人の宮殿。
 8) 香久山の西から石上山(奈良県天理市石上神宮の山(石上・豊田山)の天理砂岩を使った渠を掘り、さらにここから「宮の東山」にまで渠を伸ばし「石山丘」に石垣を造った。(平成4年(1992年)に発見)、「狂心ノ渠石山丘丘陵北東から発見(1998年)」
 9) 上田正明監修、千田稔、『飛鳥の覇者』、文英堂(2011).
 吉野宮建築:吉野は仙人の住む神仙仙境に擬せられている。吉野には水銀鉱脈がある(後述)(道教の不老不死の仙薬は丹砂(硫化水銀)。大海人皇子も吉野に隠遁した。多武峰、吉野山、宇陀野一帯は日本有効の水銀鉱山である(地図参照)。齊明天皇2年(656)の難宮・吉野宮への行幸は、応神天皇、雄略天皇の時代にもあったと古事記にはあるが、宮滝遺跡も吉野川の北、吉野町宮滝にあり、水銀鉱脈が豊富なところでもあった。

- 齊明天皇にみる二つのポイント
1. 道教思想……觀、天宮、神仙思想(不老不死)、吉野宮(神仙境)、(皇極天皇時代: シャーマン、四方拜、呪術、雨乞い(密教)、牛馬供犠)
 2. 狂心渠……宮の東の山に天理砂岩を運ぶための運河である(日本書紀)。それは灌漑用水や山城のため? 真相不明(続・明日香村史 527頁)。





水銀は不老不死(神仙思想)の仙薬であるとともに国の原資のひとつでもある

背景

齊明女帝の政策の一つ、「狂心渠」建設の真の目的は何なんだったか。日本書紀は歳条からは読み取れない。

- ✓ 石上山の石(天理砂岩)の運搬『日本書紀』 それは灌漑用水や山城のためといわれているが真相不明。齊明天皇の政治状況と神仙思想を考えれば建設目的は他にもあるのではないか？
- ✓ それは水銀(仙薬であると同時に財源でもある)の存在か？

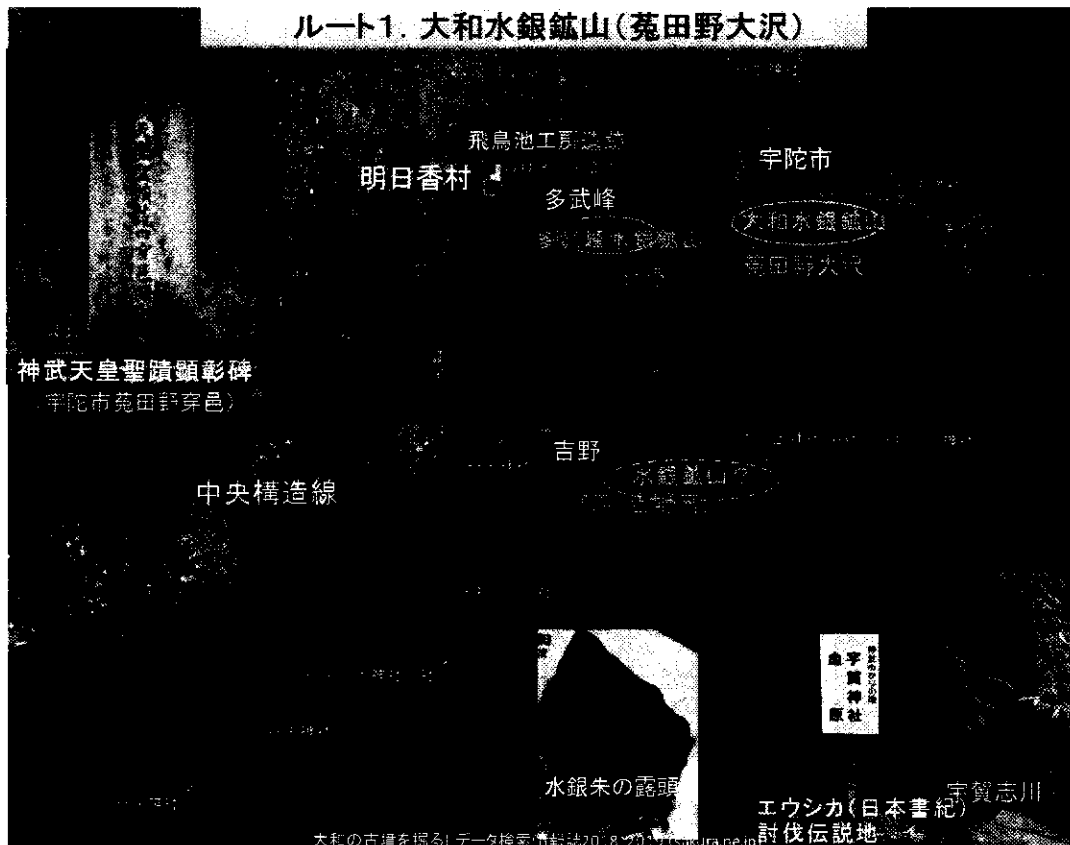
齊明天皇は秘儀や神秘性という霊的な呪術性を裡に持つ神仙思想をマツリゴト(祭事、政事)に取り入れた事実(『日本書紀』)から、マツリゴトの背景にある仙薬(水銀)(後述)を求めたのか？ また、水銀は不穏な大陸情勢の気配に対応する財源でもあり、後の律令国家体制構築の財源でもあった。(仙薬:不老不死の薬)

以下を明らかにする

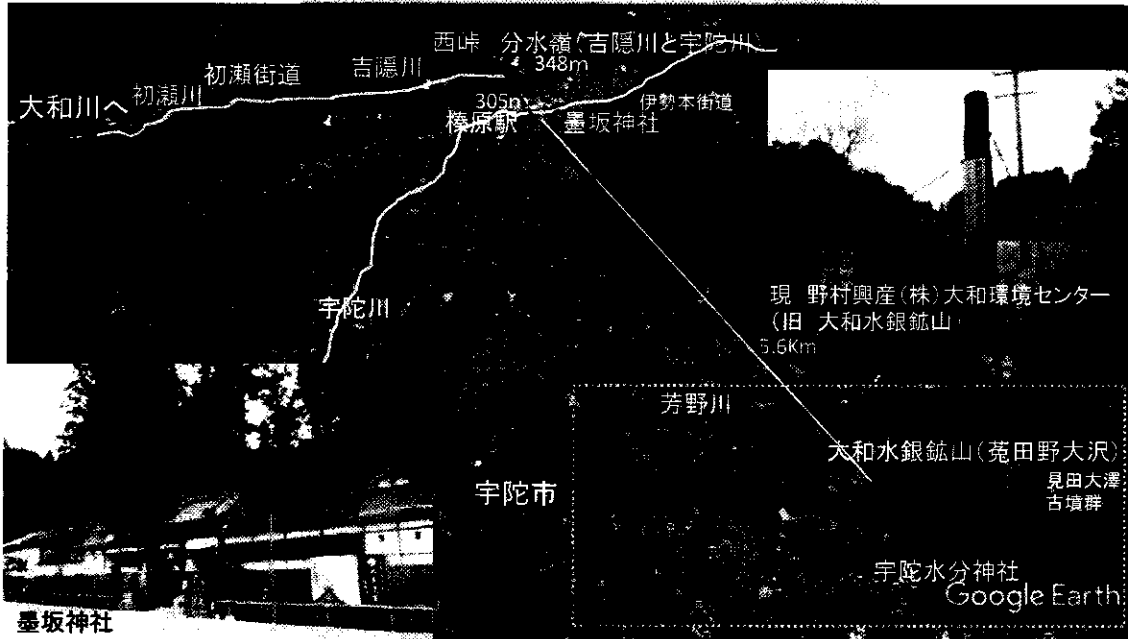
1. 飛鳥周辺の水銀鉱山から飛鳥池工房遺跡までの「水銀の道」を明らかにすることで、狂心渠の工事目的を知る。
2. 運河「狂心渠」の建設は天理砂岩の運搬というのは大義名分で、実際は重い辰砂や水銀の運搬をするための渠であった。(水銀の重さを考えれば河川を利用するのが有利である)。
3. 水銀は飛鳥を囲む四つの分水嶺を源流とする河川から、地理的な優位性に基づいて運搬されている。
4. 多武峰は齊明天皇の道教信仰の場であり、鎌足の長男の定慧が談山神社の摩尼法井(まにほうい)で法華経を講じると、井戸から龍神の出現があった。これは水銀の枯渇による稲作への転換の始まりであり、これまでの多武峰一帯の水銀の採掘は終わりを迎えたと思われる。水銀の枯渇はニウズヒメ(水銀の女神)からミズハメ(水の女神)への祭神の交代であり、この時代以前は水銀が産出されていたことを意味する。

今回、以下の4つのルートの内2つを考える。

1. 大和水銀鉱山(菟田野大沢)ー西峠ー吉隠川ー大和川ー山田道または狂心渠ー飛鳥池工房遺跡
2. 多武峰水銀鉱山(針道)ー寺川ー山田道または狂心渠ー飛鳥池工房遺跡、または多武峰ー細川ー飛鳥池工房遺跡
3. 吉野(水銀鉱山)ルート
4. 飛鳥池工房遺跡から発見された木簡に書かれた水銀の荷札ルート。



芳野川—西峠—吉隠川—初瀬川—大和川



大和水銀鉱山から集められた辰砂や水銀は(宇陀地方各地の水銀鉱山も同様)、芳野川から、やがて宇陀川へと入る。合流地は榎原町の墨坂神社西南西である。墨坂神社は室町時代、旧伊勢街道(現在の伊勢街道の南側)の天神の森(墨坂伝承地:現在の西峠の東)から移築されており、この西峠が分水嶺となっている。現在の墨坂神社が祈雨の神であることが、過去には丹生の神と水分神との両神が祀られていたことから辰砂水銀の存在が知られる。辰砂を積んだ舟は現在の墨坂神社付近で辰砂を下ろし、牛馬に積みかえは初瀬街道を通り西峠を越え、長谷、桜井方面に向かう。途中、吉隠川で舟に水銀を積みかえ、初瀬川、大和川と下る。

大和水銀鉱山(菟田野大沢)から芳野川へ

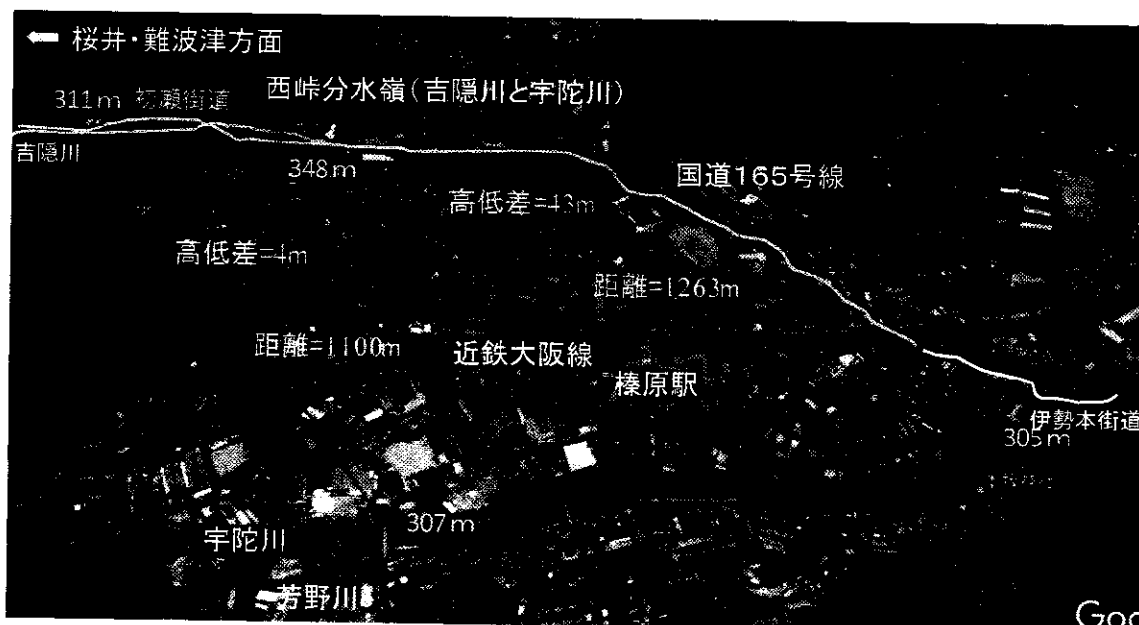


芳野川—西峠—吉隠川—初瀬川—大和川



大和水銀鉱山から集められた辰砂や水銀は(宇陀地方各地の水銀鉱山も同様)、芳野川から、やがて宇陀川へと入る。合流地は榛原町の墨坂神社西南西である。墨坂神社は室町時代、旧伊勢街道(現在の伊勢街道の南側)の天神の森(墨坂伝承地:現在の西峠の東)から移築されており、この西峠が分水嶺となっている。現在の墨坂神社が祈雨の神であることが、過去には丹生の神と水分神との両神が祀られていたことから辰砂水銀の存在が知られる。辰砂を積んだ川船は現在の墨坂神社付近で辰砂を下ろし、牛馬に積みかえは初瀬街道を通り西峠を越え、長谷、桜井方面に向かう。途中、吉隠川で船に水銀を積みかえ、初瀬川、大和川と下る。以下3つのルートを考える。①寺川を経由する天理砂岩と同様「狂心栗」ルート②海石榴市で牛馬に乗り換え山田道に入り、飛鳥池工房遺跡に運ぶルート。③ ②と同様山田道に入り、米川経由で「狂心栗」経由ルートである。

辰砂・水銀の牛馬または人足での陸路運搬予想





西峠分水嶺と墨坂神社

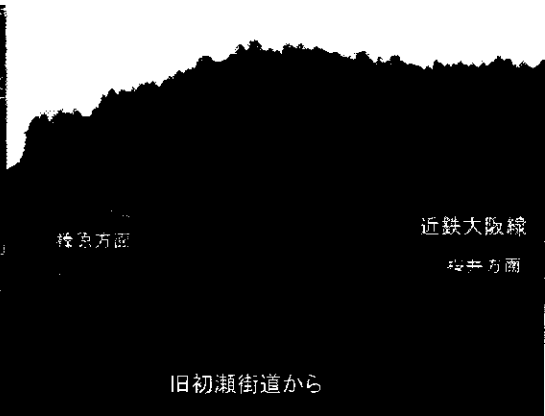


西峠分水嶺(旧道は山方面)
(吉隠川と宇陀川の分水嶺)



墨坂神社

吉隠川源流と初瀬街道から



旧初瀬街道から



旧初瀬街道から

大和天神山古墳などの水銀朱は、同位体分析から近畿圏の水銀鉱山の水銀であることが報告されている。最も近い大和水銀鉱山から芳野川—西峠—吉隠川—初瀬川—大和川(海石榴市)を経由する水銀の道が最も効率的である。

1) 南武志 他「鉛同位体比測定に基づく遺跡から出土した朱(水銀朱)の産地の解析」分析化学, 62, 825-833(2013).

大和川(海石榴市、桜井市金谷)



大和川岸边(仏教伝来の地石碑、海石榴市(八十衢(ちまた)、桜井市金谷)

推古16年(608)4月、難波津を上り、隋使・裴世清が小野妹子と共にここ海石榴市に到着した。ここから山田道を通り小墾田宮に向かった。また渡来人、文物も海石榴市に着いた。

大和水銀鉱山から運ばれた水銀の道は狂心渠ルート①か山田道ルート②③か

山田道
海石榴市一磯城嶋
金刺宮跡碑一茶臼
山古墳一寺神社
一桜の井一土舞台
一安倍文殊院一安
倍寺跡一山田寺跡
一飛鳥資料館一雷
丘

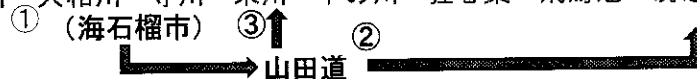
石上山(天理砂岩)→布留川→大和川→寺川→米川→藤原宮→中の川→飛鳥池工房遺跡→宮藤原宮東山(石山丘)(酒船石遺内裏跡)→中の川は今は小川に過ぎないが当時は幅2.5mほどの流路であったことが発掘確認されている。「続・明日香村史・上」531頁

Google Earth



ルート①②③、大和水銀鉱山(菟田野大沢)ルートのもともと水銀のその後

大和水銀鉱山—芳野川—墨坂神社または宇陀川合流地—(牛馬または人足)—西峠分水嶺—吉隠川—初瀬川—大和川—寺川—米川—中の川—狂心渠—飛鳥池工房遺跡



なぜ狂心渠ルート①を選ぶのか

1. 天理砂岩(比重2.6前後)¹⁾より比重の大きい水銀は陸路より水運の方が圧倒的に有利。
2. 水銀より軽い天理砂岩でさえ近道の山田道を通らなかった、と考えると水銀は当然山田道を通らない。
3. 狂心渠は水銀を運搬するための運河として考えた方が合目的である(私見)。

1) 五十嵐俊雄「日本の骨材資源—特に砕石資源について—」『地質ニュース』368号、6-18頁(1985)。

古代最大級の生産遺跡である飛鳥池工房遺跡に運ばれた水銀は、製錬・精錬後、金や銀の製品を実際に制作していた。純度の高い金・銀を得るためには水銀の混汞(こんこう)法(アマルガム法)が必要である。この方法は鍍金にも使用された。「当時の工人たちは鍍金や鍍銀に不可欠である水銀を十分認識しており、アマルガム法を使って鉱石中の微細な金や銀を集めて大きな塊を作った」としても不思議でない²⁾。出土した銀粒からは化学分析で水銀が認められている²⁾。

2) 村上隆「古代の金・銀精錬を考える—飛鳥池遺跡の事例を中心に—」、『奈文研紀要』30-31、(2007)。

一方、古代の人たちは宇陀や吉野の水銀鉱床と神仙思想が、仙薬の知識として水銀の重要性を理解していたが、水銀が体内に蓄積されることを知っていた。陶弘景著『本草集注』によれば、純度の高い丹砂を含む土地に育つ動植物を摂取すれば、増寿や延命効果に繋がると考えた³⁾。その後、齊明天皇、持統天皇は仙薬として植物の効果を追求し、シャーマンとしてのマツリゴト(祭事、政事)を行った。従って水銀はそのほとんどすべてを産業に使用した。3) 和田萃「日本書紀にみえる道教的信仰に関する記載」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』中 140-149頁、塙書店(1995)。



多武峰水銀鉱山(針道)から飛鳥池工房遺跡への道ルート2-1



飛鳥池工房遺跡へのルート2-1(針道-寺川-メスリ山古墳-山田道または狂心渠経由)



多武峰水銀鉱山(桜井市針道)は談山神社東にあり寺川沿いにある。ここから産出した水銀は、すぐ近くの寺川を下り、米川に入り狂心渠ルートの水利用できる。また、メスリ山古墳わきで下船。牛馬または人足で山田道と米川の交差点まで約1km運搬。米川からは「狂心渠」のルートか、または平坦地である山田道に入り飛鳥池工房遺跡までのルートもある。しかし、水銀の重量から考えて寺川-米川を利用する狂心渠ルートのほうが有利であろう。

多武峰水銀鉱山から寺川-山田道ルート2-1のまとめ

多武峰水銀鉱山のある針道は寺川沿いにある。大和川水系に灌ぐ寺川は大峠を分水嶺に、吉野川、紀ノ川水系とに分かれる。寺川は米川と合流し、狂心渠ルートに繋がる。最も合理的なルートはやはり狂心渠の水利用する方法である。一方、寺川沿岸のメスリ山古墳近くで下船、牛馬または人足で米川-山田道交差点(約1m)から米川に入り、中の川-狂心渠-飛鳥池工房遺跡というルートがある。また、米川-山田道交差点からそのまま、山田道を利用する方法もある。しかし、これらの牛馬や人足を使うよりもルートより狂心渠の経由が述べてきたように合理的である。

海石樺市の八十の巻は大和川(初瀬川)にあり、ここからは難波津(大阪湾)、また初瀬(長谷)街道から伊勢へ続く。また山野辺の道は三輪山の麓から三笠山、奈良の都へ続き、山田道は海石樺市近くから始まり、磐余から飛鳥まで約8km、幅18mの道が発見されている。

多武峰は、齊明天皇による道教信仰の神仙思想をイメージした建物(道観や天宮)(日本書紀656年齊明天皇2年の条参照)もあり、多武峰談山神社近くの針道水銀鉱山一帯を多武峰水銀鉱山という。談山神社は中大兄皇子と中臣鎌足の入鹿暗殺の密議から談山(語らい山)(だんざん)といわれたが、土地の人は「たんざん」と呼び、談山でなく、丹山であつたらしい¹⁾。前述のように談山神社境内の井戸で定慧和尚が法華経を講じたとき龍神の出現があつたと伝えられている²⁾ことから、祭神ニウズヒメ(水銀の女神)からミズノメ(水の女神)への、すなわち水銀の枯渇から稲作への転換があり、やがて多武峰水銀鉱山は廃坑となって行つたと考えられる。しか『多武峰略記』に収められている『荷西記』によると、鎌足が、定慧に「談岑は神仙の靈窟れいくつ³⁾」と述べたとあり、仙郷意識があつたとある⁴⁾。これは当時水銀鉱山があつたことを示すものであろう¹⁾ 中村直勝「伊勢の水銀削」『大手前女子大学論集』9巻、1-12頁。 2) 談山神社ホームページ参照。 3) ひときわ高くつきんでる様 4) 福永光司他、『日本の道教遺跡』朝日新聞社(1987)。

おわりに

狂心渠は斉明女帝の祭祀場近くに天理砂岩を運ぶために造った渠であった。それは不穏な東アジア情勢に備えた守りのための石垣であったと考えられるが、事実はそうであろうか。水銀は大陸情勢に対応する財源であるとともに、為政者の背後にある不老不死を目指す神仙思想の仙薬でもあった。やがてそれは植物に代わり、水銀はそのほとんどすべてを産業に使用された。このため 狂心渠は天理砂岩の運搬というよりも比重の大きい水銀を運搬する目的でつくられた運河であったのではないか。技術、工業の礎こそ、律令国家体制構築の資源であることから、飛鳥池工房遺跡に多量の水銀が運ばれたことは十分予想できる。飛鳥池工房遺跡への「狂心渠」は「水銀の道」でもあり、かつて小野妹子が裴世清と共に通った山田道もまた「水銀の道」であったかもしれない。海石榴市は渡来人や文物、ありうるすべての物が交流する「道」であり、市が立ち、多くの人々の情報伝達の間として、「衢」(ちまた)として重要な役割をした。

正倉院宝物の90-95%が国産であることがここ数年の研究で明らかになっている¹⁾、²⁾が正倉院には金・銀・金銅など宝飾品が多数あり、その基礎的な製造方法の原形は飛鳥池工房遺跡の工人たちの金属加工技術の蓄積によって達成されたものであろう。ひとつの銀アマルガムの製法は、後の蘆舎那仏建立の鍍金技術だけに限らず、精緻で洗練された芸術品として、今日まで我が国に受け継がれてきた。飛鳥池工房(遺跡)は、天武・持統朝の律令国家体制の一部を支えたこれらの技術、工業の礎となった官衙の工房施設である。

大和は、中央構造線上の水銀鉱床の上にある。この事実は日本古代史に必ず関係し、看過できないと考えている。

1) 歴史秘話ヒストリア - NHK(放送 令和2年 5月13日(水))。2) 奈良女子大学社会連携センター、公開講座パンフレット2016. 8. 27、内藤栄。謝辞: 地図使用に際し、以下のソフトウェアを使用、加筆しました。深謝いたします。

「Google earth」, 「Google map」, 「Yahoo 地図」, 「国土地理院地図」, 「川の名前を調べる地図」。

ありがとうございました。